

三浦綾子論 (六) — 『積木の箱』 —

* 小田島 本有

Motoari ODAJIMA

A study of Ayako Miura(6) — "Tsumiki no hako" —

一

三浦綾子の作品には『ひつじが丘』(一九六六年)の竹山哲哉、『泥流地帯』(一九七七年)『続泥流地帯』(一九七九年)の石村耕作、『銃口』(一九九四年)の北森竜太など、教師を主人公とする作品が少なくない。これは三浦が戦中において小学校教師を七年間務めていたという経験が大きく反映している。軍国主義教育に何の疑問も抱かずに子供たちを教えていた彼女が敗戦をきっかけに自信喪失に陥り、その翌年春に教職を辞した経緯については彼女の自伝作品『道ありき』(一九六九年)に詳しい。

三浦はかつて自分が教師として関わった時期を厳しく見つめ、そこから改めて昭和という時代を問い直そうとしたのである。とりわけ三浦が『銃口』という作品を書かねばならなかったのも、ちょうど自分が教壇に立っていた頃に北海道綴方教育連盟事件があったという暗い時代状況に全く無知であった自分を反省する意味合いが強かった。暗い影は民衆の知らぬうちに忍び込んでくる。そのことを彼女は自らの体験を踏まえながら『銃口』の中で訴えようとしたのである。今回取り上げる『積木の箱』(一九六八年)は、彼女の一連の作品群の中でも教育現場で生徒とどう向き合うかという永遠のテーマを真正面から問いかけた、ある意味でストレートな作品と言える。この作品は一九六七年四月二十四日から翌年五月十八日まで朝日新聞に連載された。この当時の日本は佐藤栄作首相の長期政権(一九六四年〜一九七二年)が続き、高度経済成長の真つただ中、七〇年安保を前に学生運動も一方ではさかんだった。その一方で子供たちの非行が社

会問題として浮き彫りになってきた時代と言える。

ちなみにこの『積木の箱』、キーパーソンとして私立北栄中学校の教師である杉浦悠二、その悠二が担任するクラスの生徒である佐々林一郎という二人の人物がいる。このどちらかにポイントを置いて読むことによって、作品の読み方は大きく変わってくるだろう。前者であれば教育現場に立つ一教師の物語と捉えられようし、後者であれば複雑な家庭事情を抱えた少年の心の葛藤が浮かび上がってくる。この作品のタイトルは「積木の箱」であるが、これ自体家庭の危うさを象徴している。

二

杉浦悠二は旭川の私立北栄中学校に赴任した。彼は誠実であると同時に真面目である。数学教師としての力量は既に前任校でも大いなる評価を受けていた。教子を全員高校入試で合格させたというのが彼の誇りでもあった。

その一方で彼には自己抑制的な部分が同居していた。これが生来のものなのか、あるいは後天的なものなのか、作品を読む限りでは良く分からないところがある。ただ、彼が前任校の公立中学校に勤務していた頃、組合活動に積極的であったこと、それが原因で学校を辞めざるをえなくなったことが書かれている。それ以降、彼が組合活動とは疎遠になってしまったという説明があるのだが、この事実がそ

* 釧路高専一般教育部門(国語) 小田島本有

の後の彼に具体的にどのような影響を与えたのか、作品は詳しく語ってはいない。『ひつじが丘』でも主人公である杉原良一がかつて左翼運動に関わっていたものの、そこから転向したことで自らを卑怯者、裏切者として恥じるようになり、かつての仲間たちとの接触を避けるようになったことが語られていたが、この作品も彼のそのような過去が作品全体の中でどのような役割を果たしているのか、十分に説明しきれないわけではなかった。

ただ、『積木の箱』の場合、明らかなのは悠二が中途半端な自分自身を十分自覚していたことである。それは彼が他の教師たちとの対比の中で自己を見つめる場面が非常に多いことに現れている。

一人は同僚の戸沢千代。彼女は自らの信念に基づき、反戦運動に取り組んでいる。悠二はかつて組合運動に積極的に関わっていた自分の姿をそこに重ねて眺めている。しかし、そこで重ねられているのは現在の自分ではない。もはや彼女のようになりきれない自分の限界を彼は感じているのだ。

同僚でもう一人玉脇という教師がいるが、彼は戸沢千代とは極めて対照的な人物として登場している。彼は生徒の親から物をもらうことを何ら恥じることがないばかりか、むしろそれを誘導するような態度を示す。これに対し若い教師河辺などは反発するが、玉脇はそれに動じることもない。生徒の親が教師に物を贈るのは「仁義」だとまでうそぶく始末である。このような会話が職員室の中で交わされるのであるから、当然のことながら悠二も玉脇の言葉を聞いている。しかし、悠二は若い河辺のように昂然と玉脇を批判することもない。

もう一人は日頃丁寧な仕事をしていて悠二が好感を抱いていた靴磨きの男である。この男は書き入れ時とも言える護国神社祭になると必ず仕事を休むということであった。後日会ったとき、悠二はこの靴磨きがかつて小学校の教師であったことを知る。教師時代は軍国教育に何の疑いも持たず、「日本人の幸福はこの戦争に参加して死ぬことだ」と教えていた。その教えを受けた生徒たちは少年航空兵となり、結局三人が戦死した。彼は教師というのが恐ろしい商売であると痛感しすぐに教師を辞職する。この辺は『道ありき』で語られる三浦綾子の人生が反映されていると言えよう。「あんたも学校の先生なら、靴ぐらい自分で磨くもんだ」と言われた時、悠二は「おじさんありがとう。おおせにしたがって、これから自分の靴は自分で磨くよ」と素直に応じている（「木漏れ陽」）。

また、放課後クラスの生徒たちが校庭で戦争や平和について熱く議論し合う場

面に悠二が立ち会うシーンがある。生徒たちが悠二を呼びに来たため悠二はそこに加わったのだが、このとき彼は積極的に自分の意見を言うことをせず、当たり障りのない対応に終始した。そして時間になったからと生徒たちを帰るよう促したのだが、悠二はそのことに自己嫌悪を覚えている。同僚の寺西敬子は生徒たちが議論する場に担任の悠二が加わったという事実を称賛するのだが、悠二はそのような評価をされることに戸惑いを感じているほどなのだ。敬子はその場に立ち会っていたわけではない。

以上のことから悠二という人間が見えてくる。彼はいかなる相手の言葉でも素直に耳を傾ける。そのことは彼が周囲の人間たちに好感を持たれる大きな要因となっていると言えよう。ところがこのような肯定的な評価は、彼の優柔不断さと表裏一体の関係にある。つまり彼は事を決して荒立てない男なのだ。この一見すると善人的なところが一部の人間には反発を招くことになった。その代表格が佐々林一郎である。

悠二はなかなか自分の態度を決められない。それが川上久代、寺西敬子という二人の女性に対しても如実に現れている。彼はそれぞれに対して心を惹かれており、その曖昧な態度がかえって彼女たちを苦しめる結果にもなっていた。三浦作品にはしばしばこの種の男性教師が登場する。

三

佐々林一郎は私立北栄中学校に通う三年生である。彼の父親豪一は道内でもよく知られた実業家であり、大富豪でもあった。息子の一郎にとってある時期まで豪一は誇るべき父親だったのである。

ところが一郎は数か月前からその快活な性格が一変し、教室でも憂鬱な表情を浮かべるようになった。悠二が初めて一郎と出会ったのは、川上商店で買ったパンを朝神社の境内で食べている彼の姿を見た時である。

一郎の急変には、人に言えない理由があった。それまで姉だと思っていた奈美恵が実は豪一の妾であることを知ったのである。奈美恵の部屋を訪れようとしたところ鍵がかかっており、鍵穴を覗いたとき父親と奈美恵が絡み合っている姿を彼は目撃してしまったのだ。

このことは一郎にとって二重の意味でのショックがあった。

一つはそれまで誇りとしていた父親への信頼が瓦解し、豪一が一転して嫌悪と侮蔑の対象となったことである。

そしてもう一つは、好きだった奈美恵が姉ではなく父親の妾であったという事実である。奈美恵と一郎は年が十四年離れており、一郎は奈美恵に異性としての憧れも当時は抱いていた。

このときの一郎は中学三年生で、ちょうど思春期でもあり反抗期でもあったということが事態をより厄介にしたと言っているかもしれない。思春期は子供が性に目覚める頃でもあり、ちょうど親に秘密を持ち始める時期でもある。親は子供を今まで通り子ども扱いをし、無遠慮に子供の領域に踏み込んで行こうとするが、一方の子供は自分の変化（成長）を感じている。そのことが親や上の世代に対する反抗という形をとって現れる。

小此木啓吾は『モラトリアム人間の時代』（中公叢書、一九七八年）の中で「原光景」について触れている。小此木によると、原光景とは子供が目撃する両親の性交場面のことである。子供にとってそれはショックな場面であり、ここでは「隠す側」と「暴く側」の拮抗が見られる。子供は自らの純粋性を盾に「隠す側」を責め立てるわけだが、子供はいつまでも子供でいられるわけではない。その子供もいつしか親となり子供ができるといつか「隠す側」になることを避けられないのである。小此木はナチスドイツの例を挙げながら、自分たちの純粋性を盾にして「暴く側」に身を置こうとすることの危険性をも示唆していた。

一郎の場合、目撃したのは両親の性交場面ではない。しかし、奈美恵をそれまで姉だと信じていたわけであるから、彼の見た光景は近親相姦に等しいものであり、原光景のヴァリエーションと捉えることも可能だ。一郎にとっては豪一、奈美恵に裏切られたという思いが拭い難く残ったのである。そのことが周囲への反抗という形になって現れた。

まず、最初に反抗の対象となるのは家族である。しかし、佐々林家は一郎の反抗の対象にはなり得なかった。というのも、そもそも佐々林家が家庭としては十分機能していなかったことに由来する。佐々林家は子供も含め、家族それぞれが個室を持っている。妻妾同居という事実を覆い隠すため、豪一の妻トキはこのよくな家の設計を考えた。トキ自身も家庭を顧みることがなく、家族は半ば崩壊した状態に置かれている。家族が揃って食事をすることも殆どないため、長男の一郎が家で朝食をとらず川上商店でパンを買って毎日済ませているという事実を

家族は知りようがなかった。秘密の隠蔽という意図から個室が作られたわけだが、そのことが家族団欒の困難な状況を生み出していたのである。

そもそも家族がまともに顔を会わせることの少ない家庭において、一郎が反抗すべき相手はそもそもいかなかったと言っただけでよい。一郎にとって父親の豪一が嫌悪すべき存在であったとしても、いざ目の前にするとやはり威圧感はある。たまため、一郎は面と向かって父親に反抗することはなかった。

その一郎が反抗の矛先を向けたのが担任の悠二であった。とは言うものの、彼の中に明確な意志があつて悠二に対する反抗が始まったわけではない。後に詳述するが、彼にとつて悠二は時折自分の見られたくない部分を目撃するうつつしい存在であった。そしていかにも生徒に対して理解を示すかのような口振りや物腰が、一郎には腹立たしく感じられたのである。

四

杉浦悠二と佐々林一郎との間に深い溝が横たわっている中で、その両者とそれぞれ接点を持ち、ある意味において天使的存在として設定されている川上和夫は極めて重要である。

和夫は小学校一年生。旭川から札幌までの駅を順番に間違えずに言うことのできる子供である。後に分かることだが、彼は母親の川上久代が佐々林豪一に犯された結果生まれた。もちろんその事実和夫のみならず周囲には伏せられている。久代はもともと佐々木豪一の秘書の一人だった。父親が信頼していた部下の失態の巻き添えを食い、多額の借金を抱えることになった。そのとき、久代は勤務先の社長である豪一に相談をしたのである。金を用立てることを約束した豪一は久代を料亭に呼び、そこで久代の体を奪い、それと引き換えに七十万円の小切手を置いて行った。だが、その金は生かされることがなかった。なぜならほどなくして久代の父親が自殺をし、母親もその数日後に死んでしまったからである。すべてを失った久代は会社を辞め、豪一の前から姿を消した。

久代は男の欲望の犠牲者と言える。彼女は実際に身体を汚されたばかりではない。これをきっかけに男性そのものに対する本能的恐怖を植えつけられることになった。豪一の犯した罪はそれが一過性のものでなく、その後にはわたって久代の心に深い傷跡を刻印したという点で重いものである。彼女はしばしば店を訪れ

る悠二に対して心が惹かれなかったわけではない。しかし、彼もまた恐怖すべき男の一人であった。

久代が妊娠したとき、周囲は墮胎を勧めた。しかし、彼女は宿った命を奪っていいものかと思ひ直し、出産することを決意した。このようにして生まれたのが和夫である。

和夫は周囲の子供たちからは「はんかくさい」と言われている。「はんかくさい」とは北海道の方言で「馬鹿者」「阿呆」を意味する言葉で、相手をからかう時などによく使われる。和夫はこのことについて、悠二にこう話している。

「あのね、先生が十まで数えなさいっていうでしょう。するとぼく、何を十数えようかと思うの。リングにしようか、指にしようかって、考えている間にわかんなくなるの」

「ふうん、なるほどね」

「それからね、ヨーカンをおかさんと、敬子先生と、ぼくと、功おじさんと四人でわけて食べるの。そしたら、ひとつだったヨーカンが四つになってしまふの。ぼく、すぐそんなことを思ひだしたりして、ひとつ、四つなんていうてしまふの」
(「くもり日」)

和夫はいつも「はんかくさい」と言われていて、自分を否定的に捉えているのだが、悠二の捉え方は違った。教師である彼からすれば、何でも不思議がる和夫はうらやましい存在であり、「こういう子供は、小学校時代はひどくおくてに見えることがあっても、かなり大きく成長する」と、肯定的評価をしている。確かに決して要領がいいとは言えないが、それもまた和夫の個性なのだ。

和夫を感性豊かな子供にしたのは言うまでもなく母親の久代である。和夫は人を疑うことを知らない。久代は事あるごとに息子に向かい、話をしていたが、そのことがいい影響を及ぼしている。

例えば、久代から天国の話聞いた和夫にとって、天国は人と動物が仲良くできる場所である。そこには父親もいるということを聞かされれば、天国を見たいと彼が願うのはある意味で無理もないことだった。天国を知っていると言う年上の女の子マユミの言葉に誘われて川までついて行き、ついには川に入って足をすくわれ危うく溺れそうになったのは、和夫が人を決して疑うことをしないがゆえ

であった。この和夫の命を救ったのがたまたまそこに居合わせた佐々林一郎である。

また、久代は寝る前の和夫の枕元でおとぎ話を語って聞かせるのが常であったが、その主人公の「和夫ちゃん」の右手に不思議な力があることを久代は伝えたのである。和夫はこの話を聞いて自分の右手の力を素直に信じていた。

作品の結末で一郎が悠二の当直日を覚えていて、彼を陥れるために学校に放火する場面がある。実はこのとき、幼い和夫が訪れていることを一郎は知らなかった。火事は延焼を免れ大事には至らなかったが、当直だった悠二はその責任を問われ転任を余儀なくされる。和夫もまたこのとき右手をやけどしてしまった。

和夫は一郎の犯した行為を知る由もない。自分の行動が和夫にとんでもない災厄をもたらしたことに一郎は打ちひしがれていた。和夫はこの一郎を何とかなくさめたいと思うのである。

「おにいちゃん、何を怒ってるの、こまったなあ」

「……」

「あ、そうだ。おにいちゃん、ぼくの右の手ね、ずーっとせんに、おにいちゃんにさわったら、おにいちゃん笑ったよね」

和夫は背伸びをして、自分の白いホウタイの手を、一郎の肩につけた。

ふいに一郎の顔がくしゃくしゃになった。

「あれ？ 変だなあ。ぼく、やけどしたから、ききめがなくなったのかなあ」

(略)

一郎の涙に和夫は驚いて、三度その手を一郎の肩においた。

「おにいちゃん、泣いちゃだめだよ。笑ってよ」

「おれだ！ おれが火をつけたんだ！」

一郎は何かにつかれたように、大声で叫びながら走り出した。
(「終章」)

和夫の無邪気な行動は冷え切っていた一郎の心を氷解させた。それまで自分の放火を頑ななまでに否認していた彼は、和夫の右手によって心を動かされたのである。これは担任の悠二も最後までかなわなかったことであった。

考えてみれば一郎と和夫は豪一を父親とする異母兄弟である。そのことをある時点で知った久代は、一郎に「仲良くしてあげてほしい」とお願いしていた。そ

の言葉が一郎と和夫の距離をより一層縮める役割を果たしたのは言うまでもない。

五

次に佐々林家に目を向けてみたい。

佐々林トキは豪一の妻であり、妻妾同居という屈辱的な状態を強いられた、あの意味で犠牲者である。

豪一が奈美恵を見出したのは登別温泉の飲み屋であった。まだ十五、六歳の少女がそのような店で働いていることを不憫に思い、うちに連れて来たというのが豪一の言い分でありトキもそれを信じていた。ところが豪一が奈美恵を自分のものとしたことをトキは後日知った。トキにしてみれば完全に裏切られた形になる。

トキは二人の子供を連れて実家に戻りたいと申し出たが、豪一はそのようなことで動じる男ではなかった。「いかにもおれは畜生だ。畜生というものは自分の子が取られそうになると、わが子を殺す。あの二人を、お前が連れていく前におれが殺してやる」と脅し、トキは実家に帰ることはできなかったのである。

トキの場合、確かに同情すべきところは大きいにある。だが、その一方で彼女がとても虚栄心の強い女であったことも疑いのような事実だった。彼女は自分が「寝取られ女」であると周囲から思われることに我慢がならなかった。そのため彼女は世間体を取り繕うことに汲々としたのである。例えば、一郎のことが気になり悠二が佐々林家を家庭訪問した際にも、表面的には悠二に対して明るく振る舞いながら、実際には悠二が介入してくるのを暗に拒絶する姿勢を見せている。

夫の豪一は紳士的な風貌をしており、その残忍性が他人には窺い知れないところがあった。トキは夫のそのような部分を外には漏らすまいとした。その一つが彼女の設計による家の構造であった。豪一と奈美恵が愛人関係にあることは子供たちにも隠さなくてはならない。そのためトキが考えたのはそれぞれ個室を与えることばかりではない。豪一の部屋の両側にトキと奈美恵の部屋を配置し、それぞれが行き来できるように隠しドアを設置したのであった。こうなれば豪一と奈美恵はわざわざ廊下に出なくても互いの部屋を訪れることができる。このようにすれば少なくともこの二人の関係を子供たちに知られずにすむ、という計算がトキ

にはあった。このように体面を保とうとするトキのこのような姿勢が、結果的には豪一の秘密を守ることを助長した。

トキはさかんに外出をする。外では請われて教育に関する講演も数多くこなしているが、息子の一郎の変化に気づくことはない。それだけ子供のことは無頓着だったのである。そのような母親を一郎の姉みどりは冷やかに眺めていた。

六

佐々林みどりは、母親の隠蔽工作があったにもかかわらず、父親と奈美恵の関係を小学生の頃から知っていた。彼女がどのようにして二人の関係を知ったのか、作品を読む限りでは明らかではない。

みどりはそのような事実を知っても決していじけることがなかった。むしろ明るく振る舞おうとする。悠二が家庭訪問で佐々林家を訪れたとき、対面したみどりの中に「気になる明るさ」を見出す場面があるが、それは彼女の明るさが自然なものではなく彼女が殊更作り上げたものだったからである。たとえいかに大変な状況でも決していじけることなく、自分さえしっかりしていればという発想は『氷点』のヒロイン辻口陽子の姿を彷彿させる。

そのような彼女からすれば、最近の弟の姿は不甲斐ないものに映った。家庭環境が悪いからといって自分がいじけてしまうのは、たんなる責任転嫁にしか過ぎない。それは自分で敗北を認めることになるからだ。その後みどりがしばしば悠二に SOS を送るのも、一郎のこの状況を変えてもらいたいという思いが根底にあったからである。その点でみどりと一郎はやはり血の繋がった姉弟であった。ただし、みどりが悠二に近づいたのはたんにそればかりでなく、悠二そのものに対する個人的興味があったのも事実である。

一郎がいわばとぐろを巻くように自分の殻に閉じ籠もっていったのとは対照的に、みどりは自分の意見を言い行動を起こせるタイプの人間である。

例えば、豪一が長期の不在で奈美恵が性欲を持って余していたとき、彼女は自分を昔から慕っていた一郎を誘惑しようとした。それを知ったみどりは部屋に駆け込み、奈美恵と衝突する。それはひたすら弟を守るための行動だった。

また学校で火災が起こったとき、みどりはそれが弟の犯行であることに気づく。そして豪一の前で放火したのが一郎だと暴露する。

さらには旅行に行ったのがきっかけで妊娠したと、彼女は豪一に語る。複数の相手と関わったので父親が誰だか分からない、と言って豪一を慌てさせるのだが、これは日頃女性を傷つけることを何とも思わぬ父親に対する反発の意味合いが込められていた。そして彼女は「あの女（注・奈美恵）が、この家を出て行き、人間の住める家になったら帰ります」との書き置きを残し、家を出たのであった。そして彼女は家出に際し、一郎にもこのような手紙を書き残していた。

へ一郎君

わたしきよう限り、この家を出るの。わたしのよな健康な人間には、もっと別な世界があると思うの。一郎君、わたしね、妊娠七カ月だなんてうそを言つて、おとうさんたちを驚かせてやったわ。目を白黒させてたわよ。胸がスーッとしちやつた。そのあげくに家出となると、どんなにおたおたすることでしょうね。

一郎君、あんたも少しはわたしを見習つたらどう。あの火事はあんたのしわざでしょう。堂々と名のりですて、おやしさんたちをあわてさせてあげなさいよ。いや、目を覚まさせるのよ。杉浦先生には男らしくあやまること。

わたしは、うちが清潔になつたら帰るわ。あんたもきりつと清潔になりなさい
い
（一章）

彼女は弟に勇気をもって行動することを促していた。それが本人のためでもあり、ひいては佐々林家のためだという思いが彼女にはあった。この時点で杉浦悠二は失火の責任をとって転任することが決まっていた。彼は一郎が放火犯であることを確信しながらも一郎のことをおくびにも出さず、自ら泥を被つたのである。みどりは一郎に「清潔になりなさい」と言い置いた。この言葉は一郎にとって痛いものだったはずである。

七

この時の佐々林一郎が性への目ざめという点で思春期を迎えていたこと、それと同時に反抗期も迎えていたことについては先述した。この両者はきちんと峻別できるものではなく、いわば両者が混沌として同居していたと言ふべきである。

それまで尊敬の対象であった父親が一举に軽蔑と反発の対象になった大きな一因として、父親の妾が他ならぬ奈美恵であったことが見逃せない。奈美恵は一郎からすれば大人の色気を持った女性であり、姉と思つていた頃から彼女に好意を抱いていた。その彼女が父親の妾だったのであるから、中学三年の一郎にとつてのショックは計り知れなかった。しかし、一郎の中には奈美恵に対する反発がありながら、一方では思慕の念も拭い難かった。なぜなら思春期を迎えた彼にとつて、奈美恵は十分性的興味を掻き立てる女性だったからである。

その一郎は、性的関心が高まる自分をどう扱つていいのか持て余している状況にも置かれていた。その中で、父親と自分が何ら変わらないことを知り、一郎が愕然とさせられる箇所がある。お手伝いの涼子が庭で犬とたわむれている姿を見ている場面だ。

横に倒れた涼子の上に犬が乗つたかと思うと、すぐに涼子が起き上がった。そして再び犬の背にまたがると、スカートがめくり上がつて白い太ももがあらわになる。一郎はふいに犬と涼子がみだらに思われた。犬は首を抱かれたり、自分の足を涼子の背にかけたり、絶えず犬と涼子は息を切らしながら楽しんでるようになみた。いつしか一郎は胸ぐるしくなつていた。ふとテラスをみて、一郎はハツとした。そこには和服姿の父が、葉巻をくゆらしながら、涼子と犬を眺めて立っていた。

（いつ帰つてきたのだろう？）

この二十日ほど、豪一は札幌にいたはずである。二階からみられているとも知らない豪一は、テラスの前の池のそばにおりて行って、じつと涼子の方を眺めている。一郎には豪一の気持が、自分と同じであることを、いやというほど思い知らされたような気がした。

豪一と涼子は十メートルほど離れており、その間には、桜やアララギなどの庭木が五、六本あった。涼子は豪一の存在に気づいていないようである。一郎は、その二人を二階から眺めながら、烈しい自己嫌悪にかられていた。

（おれはやつぱりおやじの子だ）

（犬の声）

この自己嫌悪と父親に対する嫌悪は表裏一体のものである。どちらも涼子と犬のたわむれを好色の目で眺めていた。自分があの軽蔑すべき父親と同じ視線でこ

の光景を眺めていた事実を知らされたとき、一郎の動揺は計り知れないくらいに大きかった。また、奈美恵を抱きたいという欲望に駆られた一郎が彼女の部屋に侵入する場面がある。妾であることを知られた奈美恵は、一郎を手なづけようと色香で誘惑しようとした。若い一郎はそのことに抗しきれなかったのである。

作品を読むと、一郎が性的興味を示す場面は随所に出てくる。この場合注目すべきなのは、彼の性的興味と反抗がしばしばごっちゃになり、彼自身自らの行動を責任転嫁する傾向が見られることである。

例えば、一郎がたまたま本屋に入り、セックスオンリーの夫婦雑誌に目が留まって結局それを盗み出す場面。佐々林豪一の息子が万引きをしたことが知られたとすれば、それは父親を大いに困らせることになるだろう。彼はそう考えていたのだが、この場合そればかりとは言えない。都合よく店の外に持ち出すことはできたものの、挙動不審な様子を見ていた店員に捕まることとなった。そこをたまたま悠二が訪れたため、結局彼が一郎を引き取って自分の家に連れてくる。「おやじを困らせてやるためです」と一郎は言うが、この言葉に悠二は疑問を抱く。本当に父親を困らせるためならもっと高価なものを盗んでいたのではないかと。一郎はあくまでも自分の行為は父親を困らせるためだと思いついでいるが、そこに欺瞞があることを悠二は見抜いていた（「断面図」）。いずれにせよ、この一件を悠二に知られたことは一郎にとつては具合の悪いものであったし、悠二が今までの以上に煩わしい存在になったのは間違いないかった。

さらに、川上商店の裏に干してあった女性用の下着を一郎が盗んだのもその一つと言えよう。一郎はそれが川上久代のものなのか、寺西敬子のものは分からずに盗んだ（結局は敬子のものであった）。そこに性的関心があったのは疑いようもない。一郎は盗んだその下着を悠二のロッカーに入れることまでする。一郎には自分が絶えず悠二に監視されているような感覚があり、そのことに対する反発があった。これも悠二に対する嫌がらせ以外の何物でもない。

悠二に対する反発はますますエスカレートしていった。その最たるものが学校への放火事件である。しかし、当初からこのような犯行が考えられていたわけではない。当初彼は自殺を考えていた。豪一の部屋と奈美恵の部屋が隠しドアで繋がっていたこと、さらには久代が豪一に犯された結果和夫が生まれたという事実を知り、その醜い情欲が自分の中にも流れていることに絶望したためである。そのため彼は遺書を書いたりもした。

彼は最初自宅での自殺を考えたが、自宅の場合秘密裏に処理されることを恐れ、次には学校での自殺を考えた。そして何とか父親を困らせるには学校を放火した方がよい、と彼の考えは辿り着く。そして、たまたま職員室を訪れた際予定表を通じて悠二の宿直日を知った。その結果、放火するならこの日だと彼は考えたのである。このように見てくると、当初自宅での自殺を考えていた一郎の考えが次第に変化していくさまがうかがえる。

彼が学校への放火を考えたのは、もともと父親を困らすためであった。だが、実際に放火をしたとき彼はその場を逃げ出したばかりか、その事実を口を噤むのである。頭の中で考えていることと実際の行動の間には明らかに乖離が生じていた。

ところで、一郎の行動はなぜこのようにエスカレートしたのか。土居健郎『「甘え」の構造』（弘文堂、一九七一年）によれば、「反抗する」ことも「甘え」の一種であり、その場合必ずその相手が必要となる。一郎の場合、十分そのことに向き合ってくれる人が身近にいなかった。両親については先述したが、姉の佐々林みどり、同級生の津島百合も女性ゆえの限界を免れなかったのである。その結果、一郎の反抗の矛先は担任の悠二に向けられざるを得なかった。しかも、一郎にとつて悠二はいつもうつつとういしい存在であり、日増しに彼に対する不満を蓄積していったのである。

悠二にしてみれば、いわれのないことで自分に迷惑が及んでいるという意識は少なからずあっただろう。だが、悠二の側にも盲点があった。一郎が朝早くに学校を訪れ、盗んだ下着を意図的に悠二のロッカーに入れた事件にそのことは象徴的に現れている。この事件が発覚したとき、戸沢千代の機転によって悠二が生徒たちに疑われることは回避された。後で悠二と千代はこのような会話を交わしている。

「だけど杉浦先生、このいたずらの主は心あたりがあるんですか」

「ないわけでもありません」

「やっぱり生徒ですの」

「らしいですね」

「そして先生、どうなされた？」

「どうもしませんよ。見逃しますよ」

「見逃すつて……それもちよつと考えものね。見つからずにすんだと思って、また悪いことをしないかしら」

「いや、バレたとわかるように言っておきましたかね。しかし見つかったと知っただけで、じゅうぶん反省するでしょう。こういう事件はあまり深追いしないほうがいいかと、ぼくは思ってるんですけどねえ」

「なるほどね、やつぱり先生は男よ。わたしだったら、二度とこんなことをやらないように、ぎゅうぎゅう油をしぼるかも知れないわ」（ロッカー）

戸沢千代は悠二を「やつぱり先生は男よ」と言つて、このような場合の生徒に対する態度の違いを男女の差に求めようとす。だが、果たしてそうであろうか。むしろ、そこには一教師としての振る舞いという点で本質的な問題が投げかけられているように思われる。

悠二は放課後の掃除の際、窓ガラスを拭いている一郎に近づき、自分も中学時代にいたずらを先生にした思い出を語り、「全く気の毒なことをしたもんだよ」と振り返りつつ、「別にあやまりにはいかなかったがね。しかし、ああいいう時にあやまるというのは、工合の悪いもんだな」と、いかにも思わせぶりの言い方をした。これは悠二にしてみると、一郎のことを慮った発言のはずだった。ところが実際は明らかに逆効果だった。

悠二は一郎を許しているつもりだった。君もあやまりにくいだろうが、先生も同じ仲間だったんだよ、と言っているつもりだった。それだけいうと、悠二は床を拭いている生徒たちのほうに近づいて行つた。しかし一郎は、自分のしわざと見破つた悠二に、更に深い憎しみを抱いた。遠回しに、自分の中学時代のことなどを語つた悠二が、いかにも狡猾なおとなに思われた。

（なぜハッキリとお前がやつたんだらうと聞かないんだ）
いつそのこと、ハッキリ答めてくれたほうが、一郎としてもあやまりようがあるはずだ。

（あいつはいつもそうなんだ。おれはチャンと知っているぞという顔をして、しかも何もいわないんだ）

一郎はガラスに強く息をふきかけて、グイグイと力をこめてふき始めた。（あの本屋の時だって、きょうだって、おれをなぐりつけたらよかつたんだ）

身勝手なことを考えながら、一郎は憤つていた。

生徒たちが帰つたあと、一人教室にいて悠二はさわやかな気持だった。一郎の行為を咎めずに、許してやれたことが自分でもうれしかった。たしかあの時、廊下にいた一郎が、あのロッカー事件を知らないはずはなかった。（ロッカー）

「さわやかな気持」「自分でもうれしかった」という表現から、悠二の自己満足ぶりが伺える。彼は自分が生徒を理解し、生徒の立場を思いやつて窮地に追い込まずにすんだこと、そして自分の気持が相手に通じている（と本人は思い込んでいる）ことに満足を感じたのだ。

ところが、悠二はきつちり叱るべき時に相手を叱ることができない。これが悠二の最大の難点であった。戸沢千代は「二度とこんなことをやらないように、ぎゅうぎゅう油をしぼる」と言つたが、彼はそこまで行くことがないのである。そこに彼の生ぬるさがあった。そもそも本気で叱るにはそれなりの覚悟と根気が要る。まさに一対一で相手と正面から向き合ねばならない。だが、彼は心のどこかで相手に嫌われたくないという気持ちが働いており、そのことがこのような中途半端な態度を生み出すのである。

これがかえつて一郎の反発を買うことになった。彼は悠二から見下されていると感じたのである。反抗することも「甘え」の一種であることは先述したが、それは相手が必要とする行為である。つまり、一郎は心の奥底で自分と正面から向き合ってくれる人、真剣になって叱ってくれる人を求めていた。反抗しながらも叱ってくれる人を求めるというのは一見すると矛盾しているようだが、叱るといふのは相手と同じ土俵に立たねば不可能なことである。そして一郎は反抗しながらも、心のどこかではこのような自分を潔しとはしていなかったのであり、自分を揺り動かしてくれる人を求めていた。それこそがまさに「甘え」である。ただ、このとき一郎は自分の「甘え」には気づいていない。そして悠二に対する不満を募らせるのである。

このように見てくると、悠二が一郎を本気になつて叱らなかつたことの意味は殊更大きい。悠二はそのことに満足を覚え、一方の一郎は怒りさえ覚えている。この溝は決定的である。そのことに気づくことができなかつた悠二は、やはり認識が甘かつたと言わざるを得ない。

その甘さは川上久代や寺西敬子に対する態度についても同様である。要は覚悟

の問題であり、悠二はそこまで踏み込む勇気が持てなかったのだ。この二人の女性はずれ悠二に対して好意を抱いていた。

川上久代は過去に大きな心の傷を負っていた。その結果生まれた和夫という男の子がいる。和夫は悠二になつき、「お父さんになってほしい」とまで言うが、悠二にはそれらを丸ごと受け止める覚悟が持てなかった。

一方の寺西敬子も悠二に心惹かれた女性であった。敬子は出会った当初から久代を好ましく思い、彼女の家で下宿させてもらうことを願っていた。自分も悠二に心惹かれ彼に自分の思いを打ち明けたりもしたが、久代の過去を知るに至って彼女を救えるのは悠二しかいないと思ひ、久代を幸せにしてほしいとの言葉を残して悠二を断念し、別の男性との見合い結婚を選択する。

作品の最後に至るまで、悠二ははつきりとした選択をできぬままに終わっている。そこに悠二の優柔不断さが認められるのである。

八

一郎の放火によって学校が火事となり、そのことが理事会で問題となった。警察でも、理事会の場でも、悠二は全く弁解せず一郎のことについては全く触れなかった。そして北見への転任を受け入れるのである。私はこの場面を読むたびに思い出す出来事がある。かつてプロ野球で活躍した小林繁投手である。小林は読売ジャイアンツのエースであったが、例の「江川事件」の渦中に巻き込まれ、電撃トレードで阪神へ移った。小林本人にとってもこれは青天の霹靂であったはずだが、彼は未練がましいことは一言も漏らさず決定にしたがった。そして移った一九七九年彼は二十二勝を挙げ、沢村賞を受賞する活躍を見せた。

『天北原野』（一九七六年）の冒頭でも放火事件が描かれていた。池上孝介と菅井貴乃は将来を約束し合った恋人同士だったが、貴乃に対して横恋慕した須田原完治は孝介を追い出すべく校宅に放火した。孝介の父親は校長であり、この火事の責任をとって校長は左遷となり、一家はその土地を離れるのである。

この作品のタイトルは「積木の箱」である。

（あの親たちは、子供を毒するだけなのだ）

悠二は心からそう思った。いくら教師が、全員まじめに生徒を導こうとした

ところで、家庭が動揺してはどうかにもしようがない。積木細工のように、がらがらと、すぐに崩れてしまうのだ。小さな崩れなら、ある程度教育で防ぐこともできるだろう。しかし、人間の心の奥底から、なだれるように崩れ落ちてくるものを、果して教育だけでくいとめることができるだろうか。できるわけはないと悠二は思った。（二こだま）

ここでは家庭が動揺するとがらがらと崩れる「積木細工」にたとえられている。学校での教育だけでは不十分であり、子供が育つうえで家庭というものがいかに大切かがこの場面では語られていると言えよう。子供を育てるといふ点で学校と家庭が上手く噛み合えばこれほど理想的なことではない。しかし、なかなかそうならないのが現実の姿なのである。『積木の箱』では、悠二がそのような家庭のあり方をさまざまな形で目の当たりにする。佐々林家のことについてはこれまで詳しく触れてきた。

山田健一はシュヴアイツァーのようになりたいと、将来の夢を語る生徒である。悠二が年明け早々家庭訪問することを思い立ち、彼の家を訪れてみると家の中の雰囲気は夏に訪れた時とは全く一変していた。健一の父親は左官屋をしており、冬場は仕事がない。そのため花札に興じる毎日であり、そこに息子を巻き込んでいたのであった。

また、クラスのムードメーカーでもあった大川松夫という生徒がいた。大川はある時悠二の家を訪れ、父親の鉄工所が倒産したために公立の中学校に移らざるを得なくなったこと、そして中学卒業後は進学をあきらめ就職をする決意をしたことを告げた。

三浦綾子には七年間の教師体験があるが、最初の赴任地は炭鉱町の歌志内である。そこで三浦は子供たちを通してさまざまな家庭環境を目の当たりにした。『積木の箱』はその時の体験が色濃く反映されている。

また、その一方で、教師が本当に生徒を見ることができているのかという問いかけがこの作品にはある。悠二がたまたま指導要録を眺めていて前任者である菊池の記述を目にする場面がそれだ。指導要録には担任がそれぞれの生徒についての所見を二、三行で記述してあるのだが、たまたま大垣吉樹の名があった。大垣も悠二には打ち解けようとせず、悠二の日頃の言動を細かく母親に報告し、しばしば母親が校長室を訪れて文句を言うということが繰り返されていた。いわゆる

「クレマー」である。その点で、大垣は悠二にとって扱いにくい生徒の一人であった。しかし、菊池の所見欄を見ると、「一見、生意気そうに見えるが、母思い、弟思いの情の厚い性格である」との記述がある。自分なら「人になじまず友人少なし」となりそうだと感じた悠二がほかの生徒のところもめぐってみると、前任者の菊池はどの生徒についても一様に長所を挙げていたのだった（「炎」）。

ここには菊池が生徒を眺める時の姿勢が垣間見える。たとえ自分にとって苦手な相手であっても、その視点からだけでその生徒を評価しないということである。その生徒が自分になじまないというのは、その生徒に問題があるからではなく、もしかすると自分そのものに問題があるかもしれないのだ。菊池の記述は悠二にそのような反省を促してくれた。

確かに大垣親子に悠二が辟易していたことは事実である。悠二が赴任した初日に教室で話し合いの場が持たれ、その場で息子の考えに周囲が賛成してくれなかったと、わざわざこの母親は悠二の家を訪れ談判に来た。また、護国神社祭の日に悠二がたまたま和夫を連れたい寺西敬子と出会い、一緒に祭りを見る場面があるが、大垣はわざわざ彼らを追跡し、その行動を母親に報告していた。後日、この母親は参観日での話し合いの際にこのことを持ち出し、「うちの吉樹など、あの様子ではどうも恋愛ではないかと申し上げておりましたが、年頃の生徒の刺激になるような行動は、厳に慎んでいただきたいと思えます」と発言したりしていたのである。津島百合の母親が「お宅の息子さんは、興信所でアルバイトでもしていらつしやるのですか」と発言したとき、大垣夫人は「吉樹は愛校の精神から、杉浦先生たちの行動を見ていたのですわ」と答えている（「視線」）。息子の行動を「のぞき趣味」として揶揄されたことに対して反発し、大垣夫人は「愛校精神」を持ち出した。石坂洋次郎の『青い山脈』（一九四七年）の一場面を彷彿させる場面である。『青い山脈』では寺島新子に対する嫌がらせから同級生の偽ラブレター事件が起きた。ラブレターを書いた松山浅子は自分の行為を「学校のため」と自らの行為を正当化したが、この言葉が一人歩きし、この問題をクラスの問題として取り上げた担任の島崎雪子が理事会で糾弾される騒ぎにまで発展するさまが描かれていた。

『積木の箱』は『青い山脈』からほぼ二十年後に書かれた。ともに教育現場を舞台にして書かれた作品であった。時代は異なっても、状況はあまり変わりがない。それだけ教育の問題は普遍的であるということでもあるのだろう。むしろ今

では、生徒たちを取り巻く環境は複雑となり、教師はその対応がますます難しくなっていると云わざるを得ない。

ただ、改めて『積木の箱』を読み返してみると、離任式を終え北栄中学校を出て行くとうるとき、校門で先日卒業式を終えたばかりの生徒たち全員が悠二を待っていてくれたこと（その中には公立中学に転校した大川松夫もいた）、そして放火の事実についてあれほど口を噤んでいた佐々林一郎が和夫のやさしさに触れ、事実を伝えるべく悠二を追いかけるところで作品が終わっていることに読者はある種の安堵を覚える。

さまざまな試行錯誤の中で困難と戦い、時には空しさを感じたりしながらも、ある時それが無駄でなかったと気づかされる。それが教育というものなのかもしれない。